

て実践されるようになった高等教育（大学教育）への「導入」を意図した目的意識的な一連の教育を言う。大学の初年次において実践されるものであるため、「初年次教育」とほぼ同義と考えて良い。

我が国においても「大学全入時代」を迎えつつある中、大学教育（高等教育）のユニバーサル化は進行しており、事の是非はともかくとして、入試方法の多様化等の中で入学者の学力の不揃い・目的意識や入学動機の不明確化などは確実に進行している。この傾向は、本学の中で言えば、他学科と比して、職業選択や具体的な活動領域と直接的には結びつきにくい一方で、ムード的には時代の要請もあり向社会的なイメージも強い社会福祉学科ではより深刻であるように感じている。そこで、社会福祉専門教育を見据えた上での意図的・体系的な導入教育のあり方を検討することは重要なことと考えている。本報告はこうした目的に沿う形で試論として検討したものである。

Ⅱ. 導入教育とリメディカル教育

少子化時代を迎えた日本の大学でも受験者数の確保、ひいては入学者確保のために入学試験を多様化し、学力試験の科目数を減らし選択科目数を拡げるような傾向がみられる。その結果、例えば医学系学部において高校生物の補習を行うなどの試みが行われている。こうした「学習技能分野における特別な欠如を矯正する」教育を我が国ではリメディカル教育というタームをあてることが一般的である¹⁾。そして、このリメディカル教育と導入教育が混同され、あるいは区別せずに扱われることがある。

本報告ではこれを区別して考える。具体的にはリメディカル教育には通常含まれない、新入生オリエンテーションや学習意欲の向上そのものを意図した取組なども含めて考える。更に、本報告では、大学における社会福祉専門職養成教育を核としつつも、必ずしも有資格者養成教育に留まらない社会福祉専門教育の一環としての導入教育を考えることにする。

Ⅲ. 社会福祉専門教育から導入教育への要請

上記の目的に沿うためには、まず、「社会福祉専門教育では何を必要としているのか」を検討しておく必要がある。

本学のみならず社会福祉専門教育を目指す大学の大半が、単に資格取得を目指すのではなく有意な専門職としてのソーシャルワーカーの養成を少なくとも重要な目的の1つとして掲げている。では、ソーシャルワーク及びソーシャルワーカーとは何であろうかが問題になろう。まずは「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人

社会福祉専門教育における導入教育の検討

杉山 克己¹⁾

1) 青森県立保健大学

Key Words : ①社会福祉専門教育 ②導入教育 ③大学のユニバーサル化

I. はじめに

「導入教育」とはユニバーサル化する米国の大学におい

間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」という I F S W2000の定義に依拠しよう。前半部分は目的・目標について触れ、次に実践の基礎理論としての「人間の行動」と「社会システム」に関する理論を示している。そして、その活動の場としての人と環境が「相互に影響し合う接点」に介入することを延べ、最後に、ソーシャルワークの基本的価値としての「人権」と「社会正義」の原理を示している。有資格者養成教育も含め大学における社会福祉学教育（以下、社会福祉専門教育）では、これらの理解と実践および体得が求められる。

これらの中で、知的ベースによる理論の習得、目的や価値などの「理解」は基本的には講義形式により提供されることが可能である。それ故、導入教育的には一般的な基礎的学習スキル（ノートの取り方、論文レポートの書き方、ディスカッションの仕方やクリティカル・シンキングなど）が要請されるだろう。

これに対し、価値そのものや介入実践の具体的展開などの体得は、演習や実習が中心になって教育されることになるだろう。この場合、導入教育に対しては広義の人格形成（自分自身や他者との関わり方・社会との関わり方、ストレスマネジメント、多様性の理解と尊重、友人や異性等とのコミュニケーション力、公共心、社会正義や時事問題への関心、キャリア・プランニングなど）が要請されるだろう。

IV. 社会福祉専門教育における導入教育の課題

日本では社会福祉実践者の国家資格となっている社会福祉士については、「日常生活」を営むのに支障のある者への相談援助業務をその役目と規定している。この「日常生活」というキーワードは、介護福祉士や精神保健福祉士においても登場する。つまり、日本では日常生活との関連において人権や社会正義という概念を理解し、ソーシャルワークの目的を実現していくことが求められていると考えられよう。それ故、社会福祉専門教育の面から考えると、導入教育に関しては、先に触れた広義の人格形成がいっそう重要であると言えよう。ところが、石川が言うように「近年の高等教育機関で学ぶ学生は、社会生活体験が乏しい」。そして「いわゆるボランティア体験の機会は増えても、社会福祉教育の根幹となる人権感覚を醸成できる機会が希薄になっている」²⁾ という面は否めない。こうした課題に対処するためには、いわゆるカリキュラム上に展開される科目教育だけでは困難に

なっている。

V. 課題への対処法

- ①教科目を超えた枠組みの必要：具体的には英国などで行われている、学生自身に何らかのベンチマークをベースに自分の学習到達目標を設定させ、学生の自己管理を求め、そして学生自身による到達度評価の確認をさせる方法を提案する。
- ② Reflective learning と Reflective practice の統合的教育実践の必要：Schönが提唱した reflective practitioner（内省的実践家）を養成することが今日、対人支援職養成教育にとっては最も重要な課題の1つであろう。①のより具体的なあり方として、ポートフォリオを用いることと、早期の他学科を含めたグループワークを伴ったフィールドワークをここでは提案しておく。

VI. 文献

- 1) 山田礼子、一年次（導入）教育の日米比較、東信堂、2005. 12
- 2) 石川到覚、ソーシャルワーカー養成教育の基盤づくりを求めて、2006年度全国社会福祉教育セミナー、社団法人日本社会福祉教育学校連盟、129-130、2006. 11